

現代中国をめぐる研究環境の変容

松村嘉久

現代中国研究への関心の高まり

現代中国研究への関心は、一九八〇年代から一九九〇年代にかけて、過去に例を見ないほど高まってきている。アジア政経学会では、一九九八年度の会員総数九八一名中、研究対象国として「中国」を挙げた者が三二五名、これに「香港」「台湾」を挙げた者を含めると三五〇名にもものぼり、会員総数の三分の一強を占めている。現代中国学会や中国現代史研究会でも、一九九〇年代に入って、会員数が増えている。

現代中国研究への関心が高まるにつれ、その研究成果も劇的に増加してきた。多くの研究者が実感していることは思うが、現代中国関連の文献をこまめに収集していくと、研究室の書棚は数年で満杯になるほどである。では、なぜこのように、現代中国をめぐる研究成果が激増してきたのであろうか。その要因としては、次の三点が考えられる。

第一の要因は、改革開放以降の現代中国が、発展途上でありながら驚異的な経済成長を続け、経済システムのみならず政治システム・社会システムなどをもラディカルに変容させ

てきたことにある。鄧小平が唱導した改革開放は南巡講話を経て一挙に加速され、現代中国は計画経済体制から社会主義市場経済体制へと歩みを進めた。経済システムのドラスティックな変容は、従来の国家のあり方を根底から問い直すことともなり、そこから生じる多様な問題が顕在化してきた一九九〇年代の現代中国は、世界中の様々な学問分野の研究者の関心を集める魅惑的な事例となった。

第二には、改革開放の進展が、外国人研究者による中国での現地調査に門戸を開き、中国人研究者の海外留学をも促進し、国際的な研究交流が盛んになってきたことが挙げられる。外国人による現地調査にはいまだに何かと制約も多いが、かなり自由に行えるようになった。一九八〇年代に海外留学した中国人研究者のなかには、留学先で学位を取得して、現代中国研究者として研究職に就いている者も少なくない。

第三に、現代中国から発信される情報量が、一九八〇年代半ばから一九九〇年代にかけて激増し、そうした情報へのアクセスが、以前とは比較にならないほど容易になったことも見逃せない。一九八〇年代から中国国内では活字メディアの復刊や創刊が相次ぎ、系統的

な統計データが満載された年鑑のたぐいも続々と出版されてきた。近年では活字メディアだけでなく、映像メディアやインターネットなどを通しても、膨大な情報量が現代中国から世界中へと発信されている。

ここで改めて注意を喚起しておきたいのだが、現代中国研究への関心の高まりは、日本固有の現象ではない。新たな国家のあり方を模索している中国国内はもとより、日本と同様、その成り行きに注目している英語圏でも認められる。

インターネット社会における 研究環境の変容

一般に、オリジナリティの高い研究論文を執筆するには、先行研究を調べあげて収集し、それらの内容を吟味したうえで、自らの研究を位置づけなければならない。ところが、現代中国関連の研究成果や中国発信の情報量は激増してきている。一九八〇年代まではこうした状況に直面して、誠実な研究者は、困惑しつつも手近なものを読みあさり、研究せざるを得なかった。しかしながら、一九九〇年代に入ってインターネット社会が成熟してく

るにつれて、現代中国をめぐる研究環境も大きく変容してきた。

国立情報学研究所情報検索サービス（NACSIS-IR）は、二〇〇〇年からインターネットでの利用が可能となり、その検索方法も簡略化され急速に普及してきている（表1参照）。現代中国に関連する先行研究を整理する際も、ここで提供されている文献データベースを利用

表1 現代中国研究に利用できるホームページ

ホームページ名	ホームページアドレス
NACSIS-IR	http://webfront.nacsis.ac.jp/
NACSIS Webcat	http://webcat.nacsis.ac.jp/webcat.html
中国新聞ネットワーク	http://www.cnnchina.com/
新華網（新華社通信）	http://www.xinhua.org/
人民日報	http://www.peopledaily.com.cn/
中国インターネット新聞中心	http://www.china.org.cn/
政府上网工程	http://www.gov.cn/
国信中国法律網	http://www.chinalaw.net/
中国国家図書館	http://www.nlc.gov.cn/

（出所）筆者が2000年7月末に、各々のホームページにアクセスして作成した。

用して、複合検索機能などを上手に使いこなせば、膨大な先行研究のなかから、自らの研究主題と関連するものを短時間のうちにリストアップできる。さらに、全国の大学図書館などが所蔵する図書・雑誌の総合目録データベース（NACSIS Webcat）を利用すれば、リストアップした文献がどの図書館にあるのか瞬時に判明する。近年では図書館ネットワークも整備されてきたので、最寄りの図書館にない文献でも、数日間から数週間でのコピーが入手できる。こうしたサービスがインターネットで提供されるようになった現在、膨大な先行研究を渉猟する作業は著しく省力化され、文献の入手も従来になく簡便化された。ところが、こうした状況は研究者に新たな試練を突きつけてもいる。情報検索システムが未熟であり普及もしていなかった一九八〇年代なら、「この文献の存在は知らなかった」といった言い訳も、ある程度は通用したし容認もされた。しかしながら、今日のような状況下では、そうした安易な言い訳は通用し難くなっている。

とりわけ現代中国研究においては、統計データや資料の出所が同じであることが多いため、先行研究と自らの研究との差異化をはかる作業が重要な意味を持つ。現代中国研究でも国

際化と学際化が急速に進む昨今、先行研究を渉猟する際には、日本語のもののみならず中国語や英語のものも、自らの専門分野のものみならず他の学問分野のものも、視野に入れないければなるまい。海外留学組の優秀な中国人研究者や、香港・台湾・シンガポールなどの中国系研究者が、英語圏でも活躍するようになった今日、英語圏での研究動向は是非とも踏まえないければならなくなった。情報検索システムの充実と普及は、現代中国研究だけでなく、広く社会科学をめぐる研究環境に変容を迫まっている。

一方、現代中国でも一九九〇年代半ばから、インターネット産業が急成長を遂げてきており、現代中国研究に利用可能な情報が、ネット回線を通じて世界中に発信されている。ここでは、表1に示したホームページをごく簡単に紹介しておこう。

『中国新聞網絡中心』には、中国でホームページを開設しているほぼ全てのメディアがリンクされている。『新華網』と『人民日報』は日々のニュースを中国語・英語・日本語で提供するだけでなく、過去のニュースや記事がデータベース化されている。人民日報の記事データベースは無料で提供されており、一九九五年以降の記事は、キーワード検索して

その全文が閲読できる。『中国互聯網新聞中心』では、『中国政府白書』、『北京周報』、『今日中国』、『國務院公報』などが公開されている。国家プロジェクトでもある『政府上網工程』には、國務院管轄下の各部署のホームページがリンクされており、現代中国研究には欠かせない情報源である。新中国建国以降に公布された法律などは、『国信中国法律網』でキーワード検索ができ、その全文も読める。膨大な蔵書が検索できる『中国国家図書館』は、中国で刊行された図書目録としても利用できる。いずれのホームページも作成されて数年程度であるため、そこから得られる情報も比較的最近のものが多く、これらホームページのリンクを丹念に開いていけば、ここでは紹介しきれなかった様々な中国情報にもアクセスできる。興味のある方は是非とも暇を見つけて、どのような情報が掲載されているのか確認していただきたい。

さて、ここで紹介したホームページに掲載されている情報は、これまで学術論文で引用されてきたものと変わりない点に留意していただきたい。キーワード検索が可能なホームページからは、わずか数秒間で、研究主題にそった情報が網羅的にリストアップでき、キーワード検索機能のないホームページでも、画

面上の文字検索機能を利用すれば、短時間で得たい情報に肉迫できる。従来なら最新のニュース・記事・政策・法律などにアクセスするには、早くても数日、正式に活字化されるのを待てば数年を要した。

それが今やその日のうちにパソコン画面上で閲読でき、さらには、検索機能を利用することにより、研究者が自らの研究関心に基づいて、膨大な情報のなかから、必要とするものを短時間で選択的に入手できるようになった。換言するなら、膨大なインフォメーションをインテリジェンスに転換するための初歩的整理が、簡便に迅速に行えるようになった。さらに重要なのは、こうした情報の収集と整理が、インターネットに接続したパソコンさえあれば、世界中のどこからでも、また誰にでも可能になった点にある。現代中国をめぐる研究環境は、中国がインターネット社会に参入したことによっても、大きな変容を遂げたと言えるのではなからうか。ただし、こうして収集された情報の真偽やその真実みが、従来どおり不可欠であることに変わりはない。表1に挙げたホームページは、いわば公的なものなので大きな問題はないが、中国発信のホームページ情報にも、怪しげなものが混在している可能性は高い。

相対的優位性の崩壊

毛沢東時代の現代中国研究において、英語圏研究者と比較して、日本人研究者は、中国語の読解力に優れているという相対的優位性を保有していた。漢字文化圏に育った日本人

研究者が中国語文献の読解に習熟する時間は、英語を母語とする研究者と比べてはるかに短い。中国発信の情報がそもそも少なく、それも中国語の活字メディアに限定されていた毛沢東時代、日本人研究者の相対的優位性は、大きな意味を持った。一方で、毛沢東時代の中国人研究者は、自由闊達な研究活動を行える状態になかったし、国際的に通用する資質を備えている者も少なかった。

ところが、現代中国研究の国際化が進展した一九九〇年代に入って、日本人研究者の相対的優位性は崩壊したと言えよう。その最大の要因は、優秀な中国人研究者たちの活躍に求められる。既述したように、一九八〇年代に海外留学し始めた中国人研究者のなかには、留学先で学位を取得して、研究職に就いているものも少なくない。その過程で彼／彼女らは研究成果を精力的に発表してきた。中国語だけでなく英語にも堪能な香港・台湾・シン

ガポールなどの研究者たちも、一九八〇年代あたりから、国際的な学術雑誌で優秀な研究成果を発表し始めた。こうした中国語を母語とする新たな現代中国研究者の台頭により、日本人研究者の相対的優位性は崩壊し、対等な立場で研究を競いあわざるを得ない状況がすでに生み出されている。

国際化と学際化が同時に進展してきた一九九〇年代は、現代中国研究者自体の相対的優位性すらも崩壊した時代であった。系統的で詳細な統計データが、過去にもさかのぼって公表され、中国発信の情報量も激増し、それらへのアクセスがメディアの発達と多様化にともない容易になった現在、従来は必ずしも現代中国を専門の研究対象としてこなかった研究者たちもが、各々の特性を活かして現代中国研究に参入し、優秀な成果を残し始めている。現代中国研究の専門家は、現代中国を知りすぎているがゆえに、その「特殊性」を強調しがちであるが、新たな参入者はむしろ新鮮な目で、その「普遍性」を追求する傾向が強い。そしてこの「特殊性」と「普遍性」の問題を解決するため、新たな参入者は、中国人研究者との共同研究という形で、両者の調和を模索し始めてもいる。

つまるところ、日本人現代中国研究者は、

その日本人である相対的優位性も、現代中国研究者である相対的優位性も失った。今や日本人現代中国研究者は、英語圏研究者や中国人研究者と対等の立場に立ち、新たな参入者たちとともに、国際的かつ学際的な場ですでに切磋琢磨しあう時代に直面している。

新世代の現代中国研究者に向けて

では、このような新たな研究環境のもと、新世代の現代中国研究者には何が求められるのであろうか。自らへの叱咤激励をもちかえり、その課題を整理しつつ私見を述べたい。

まず第一に、新世代の現代中国研究者には、これまで述べてきたような新たな研究環境に適応することが求められよう。英語圏研究者や中国人研究者と競合する時代を生き抜くためには、先行文献の渉獵や現代中国に関する情報の収集・整理に際して、インターネットなどのニューメディアを駆使することは避けられまい。さらには、国際的な研究交流が今後盛んになるであろうから、中国語の読解力だけでなく、英語圏研究者や中国人研究者と対等にわたりあえる総合的な語学力が、中国語でも英語でも求められよう。

第二には、意外かもしれないが、現代中国という現場を自らの足で歩き、自らの目と耳で検討し、自らの経験と知識を駆使して現場から発想するフィールドワークの能力が重要となろう。活字メディアにしろインターネット情報にしろ、その情報の真偽を確かめて何がしかの判断をくだすのは、その情報の受け手自身に他ならない。膨大な情報が溢れかえり、それらが研究者に限らず、万人に共有されるからこそ、なおいっそうフィールドからの発想は重要になる。現代中国の場合は、インターネットに限らず、あらゆるメディアを国家権力が管理しようと試みる傾向が強いので、メディア情報はフィールドに向かうに際しての参考資料程度に捉える余裕が必要なのではなからうか。

第三に、新世代の現代中国研究者のみならず、一般に若手の地域研究者は、日本や自らの専門分野にとどまらず、国際的にも学際的にも通用する幅広い視野を養う必要がある。そもそも地域研究は、多様な研究者たちが多層的多角的に特定地域の実態を捉えるなかで、個々の研究者たちの知的で生産的な相互作用を誘発する場である。その過程において個々の研究者たちは自らのよりどころを問い直し、新たな境地を見い出そうとしてきた。しか

し残念ながら、日本では学問分野の細分化と専門化が過度に進展し制度化されてきたため、学際化が声高に叫ばれる今日でさえ、地域研究者は育ち難い状況にある。比較的研究者層が厚く、共同研究も盛んな現代中国研究において、新たな地域研究のあり方が議論され模索されることを願ってやまない。

第四に、新世代の現代中国研究者には、国際的な学術交流の橋渡しとなるような研究が期待される。既述したように現代中国研究の成果は、日本でも中国でも英語圏でも、劇的に増加してきている。ところがこの三者の間で、お互いの研究動向や研究成果は、必ずしも充分には認識されていない。当座は、日本での現代中国研究の動向と成果を、中国や英語圏にも紹介すべく各々の言語で展望し、逆

に、中国や英語圏でのそれを、日本語で展望することが急務ではなからうか。膨大な文献を丹念に読み込み整理し位置付けるといった地道な作業ではあるが、次世代を担うような若手研究者が取り組むならば、その過程で得るものは計り知れない。日本における現代中国研究を知的搾取の場にしないためにも、マルチラテラルな研究動向の展望に取り組み、その成果を現代中国に還元することも考えなければなるまい。

さて、ここまで述べてきたことは、個々の現代中国研究者の努力だけで実現するものではない。とりわけ第三や第四の課題の実現には、なによりも、多様な関心を持つ若手の研究者が自由に集い、互いに生産的な議論を交わしつつ、共同研究できる学際的な場が不可欠である。幸いなことに、大阪経済法科大学アジア研究所は、多彩な現代中国研究者を抱えており、中国や英語圏との研究交流も盛んに行っているし、英文学術誌も刊行している。全ての課題に挑戦することは不可能であろうが、当研究所が中心となって、日本・中国・英語圏における現代中国研究のマルチラテラルな展望作業に取り組むことは、極めて意義深いのではなからうか。

『付記』本稿は、二〇〇〇年三月二一日(土)の日本現代中国学会関西西部会春季研究集会において、「一九九〇年代における英語圏の現代中国研究―地域政策を中心に―」のタイトルで発表した内容の一部に加筆したものである。この集会にご参加いただいた諸先生方や院生諸氏からは、色々なご指摘・ご助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

(まつむら よしひさ/アジア研究所客員研究員)